


# 神田日勝記念館 だより

 神田日勝記念館 〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL (01566) 6-1555



晴れた日の風景 1968年

## Contents

- 2 『新館長に小檜山博氏が就任』  
『感謝を込めて』—高橋揆一郎館長の退任に際して—
- 3 取材ノート 『室内風景を巡って』  
取材ノートII 『神田日勝の幼なじみの人たち』
- 4 『人間の情景—北に生きる人々』展／『牛』修復  
『馬(絶筆)』の陶板画
- 5 寄稿文 『人と人の縁故』  
寄稿文 『生活感と焦慮感』
- 6 芸術鑑賞バスツアー／子ども芸術鑑賞ツアー  
神田日勝の絵のなぞを探ろう／冬休み子どもワークショップ
- 7 子ども絵画教室／絵画教室／米坂ヒナノリロビー展  
春休み子どもワークショップ／神田日勝記念館の学校利用
- 8 今後の事業予定／感想ノートより  
新発売の絵はがき／寄贈本紹介

2002. 3.31

16

# 新館長に小檜山博氏が就任

平成十四年四月一日付けで作家の小檜山博氏が、神田日勝記念館の第三代館長に就任しました。



小檜山新館長

た。小檜山館長は、滝上町出身、「出刃」で北方文芸賞、『光る女』で北海道新聞文学賞・泉鏡花賞を受賞され、現在も『風少年』等を始めとして健筆を揮っています。神田日勝の画業に深い興味と共感を示し、第一回「蕪壱祭」(開館記念祭)のメインゲストを始め、『画集・神田日勝』『神田日勝デッサン集』『私の神田日勝』を企画し、自らも「馬の涙」等日勝に関する文章を発表されています。「飯場の風景」に描かれた労働者像に「農民だった自分の父の姿であり、北海道開拓者の原風景である」と語り「創作に携わるものとして作品の心を伝え、日勝の魅力を広めたい」と抱負を語っています。

健康上の理由で勇退される高橋揆一郎前館長は、平成六年七月に記念館長に就任。子どもたちに親しまれる美術館造りを提唱、全国展開を遂げた小中学生を対象とした「馬の絵作品展」を発案、イラストでつづる「絵

本・神田日勝」の発行、開館記念祭「蕪壱祭」の命名など、大きな足跡を残されました。親子で気軽にスケッチブックを持って恵まれた鹿追の緑をスケッチさせたいという思いから「ファミリー美術館」事業を提唱されるなど、確固たる視点で神田日勝と記念館をとらえ、その存在感とあいまって、現在の神田日勝記念館の基礎造りをなし遂げました。

## 「感謝を込めて」

神田日勝記念館運営協議会

委員長 三井 福源

神田日勝記念館の建設推進に、当初より深く関わりを持たれ、又、館長としてその責務を遂行され、多大な功績を残された高橋揆一郎氏が、この三月で退任される。健康上の理由であるが、誠に残念である。

芥川賞作家の高橋氏を館長に迎えたことは、単に著名人をお願いしたという理由からではなく、根底に神田日勝の作品

に共鳴した絆があったように思います。想い起こせば、高橋館長との出会いは、らんぷの会が日勝記念館の建設に向けて、その熱いメッセージを綴った文芸誌「ほうし」に寄稿していただいたことに始まります。

今想うと、何と大胆なお願いをしたのかと気恥ずかしい限りであります。高橋館長は快く引き受けてくれました。その後、多方面に渡り、心強い御支援をいただいたことを、今もはつきり覚えております。

高橋館長は在任中、開館記念日を「蕪壱祭」と命名され、又本館をファミリー美術館として活用することを提唱されました。そして、企画・運営面でもお力添えをいただき、特に補助金等の導入のアドバイスもいただきました。

私は、高橋館長が残された多くの功績を継承すべく、今後も努力する所存であります。この数年間、共に仕事ができたとを誇りに思います。

どうか、早く健康を回復されることを切に願う次第です。感謝の言葉が見つからない程お世話になりました。



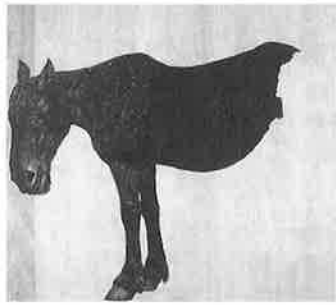
高橋前館長

取材ノートⅠ

# 『室内風景』を巡って

『神田日勝アルバム』編集の話が具体化し、それに伴う取材を始めている。その中で最後の完成作『室内風景』と絶筆『馬』(未完)について、若干の知見を得た。

僕だけかもしれないが、作品理解の中で、『室内風景』がまず描かれ、完成後絶筆『馬』の制作に取りかかったというふうを考えていた。ところが『室内風景』が絶筆である」という見解が取材の過程で寄せられた。それによればまず『馬』の制作に着手し、それが完成される以前に『室内風景』が最後の完成作として全道展に出品されたという。それでは『室内風景』が絶筆なのか。米山将治氏の『十勝美術ノート(3)』(『トカプチ』3)によれば、没年の独立展に『室内風景』と絶筆『馬』が出品予定だったという。両作品がほぼ同時期に構想されたことがうかがわれるが、制作順序で絶筆の位置付けが変わってしまふ。ただこれに關しては、『室内風景』の全道展出品後『馬』に手を加えていた記憶があるという証言もあり、着手時期は別として絶筆作品に変更はないことになる。今、この点を追跡取材している。



「馬」(絶筆・未完)

もう一点、『室内風景』の背景の新聞紙の上部に描かれた広告に「待望の17」**新登場!!**

「室内風景」(部分)



「室内風景」



氏によれば、『室内風景』は全道展終了後各地を巡回しており、展覧会後の修正は果たして可能なのかと疑問を呈された。では全道展では当該箇所はどう描かれて出品されていたのか。第二十五回全道展の図録には同時出品された「人間B」のみが掲載されており、この確認は取れない。

(菅 訓章)

と描かれていたが、その点を展覧会で指摘すると現在の『17』に修正されていたという。修正については神田ミサ子氏も認めておられる。ではこの修正はいつなされたか。渡邊禎祥

という文字が書かれた三菱電機のテレビの欄がある。徳丸滋氏によればこの『17』は初め『17刑』

取材ノートⅡ

## 『神田日勝の幼なじみの人たち』

脇坂裕氏(神田日勝記念館友の会々長)は、町内の笹川に住み、日勝の一歳年上で笹川小学校三年の時に初めて会い、複式学級で同じクラスになったそうです。小学校時代の日勝少年は、絵が好きで休み時間にもノートに馬



脇坂裕氏

などの動物をとて上手に描いたそうです。中学卒業後は、青年団活動として演芸会

や盆踊り、体育大会などがあり、日勝は活発に活動に参加していたようです。日勝が全道展に入選した折に、袋いっぱいのりんごを買ってきて皆に配ってくれたことが印象に残っているそうです。

山岸明氏(鹿追町議会議員)は日勝と同年で、脇坂氏と同様に同じクラスになったそうですが、日勝の印象としてはひょうきんで相撲が強かったそうです。



山岸明氏



田中稔氏

って実現しなかったと語ってくれました。(釜沢 恵子)

田中稔氏(商工会々長、飲食店経営)は、鹿追中学校の三年間同じクラスで、その頃のエピソードとして、休み時間に日勝がゴッホの画集を見て田中氏に「ゴッホは壁の色を出すために悩んで、本物の壁の表面を削って、それを絵の具に混ぜて描いたんだ」と教えてくれたそうです。田中氏が成人して鹿追にもどって料理屋を開業する折に、開店記念として日勝が絵を描いてくれるというので、魚の絵を頼んだが、間もなく亡くなってしまう





神田日勝の二点の『飯場の風景』(一九六三年作と翌六四年作)を軸に、北海道の厳しい自然環境の中で生きる人間像を表現した作品に焦点を当てて、その中に表れてくる風土性と特徴を明らかにしようとしたものです。

神田日勝は、飯場で働く肉体労働者たちの一時の休息の場面を俯瞰的な構図で捉え、抑えた色調の中にその身体を逞しく描いたものと、屋根や板壁や煙突のマチエール(材質感)をベニヤ板にペインティングナイフで描く彼独自の表現技法で克明に表したものとがあります。

本田明二の『マントー立つ』は、楕円形の頭部を持つ木彫の立像で、単純化されたフォルムの中に北国の風土感を漂わせ、米坂ヒデノリの『国境』は、膝を抱えたポーズの木彫で、素朴な力強さと強い精神性が感じられます。北岡文雄の版画二点は、

共に北海道の漁村に取材し、木口木版独特の硬質な刀跡で、厳しい北の大地とそこに生きる人々を力強く表現しています。

伏木田光夫の『漁師の部屋』は、故郷浦

平成13年度特別企画展

「人間の情景 — 北に生きる人々」

平成13年12月18日～平成14年2月3日

河で制作された作品で、対角線の構図の中に配された人物が緊張感のあるフォルムとして描かれ、豊島輝彦の『魔船』は、画面いっぱい描かれた船体が重厚な画肌で描かれ、共に漁村に生きる人々の生活の重さを感じさせます。

一木万寿三の『立冬』は、遠景に白鳥が飛来する湖、中景に白い柵、近景に枯れ草と少年を配した構図で、北の原野の冷たく澄んだ空気感があり、松樹路人の『原野』は、キュビズム的な画面構成で、冬の原野を背景に、画家自身が物語的要素の中に詩情豊かに描かれ、松島正幸の『夕暮の橋』は、釧路の幣舞橋を舞台に、そこに行き交う人々を北国の季節感や生活感を漂わせて情感豊かに表現しています。

会期中の一月十三日(日)に、展示室でギャラリートークが行われました。作品の前で作家の経歴や作品の特徴、時代的背景や日勝との関わりなどが説明され、二十余名の参加者は熱心に聞き入っていました。



『馬(絶筆)』の陶板画



北海道鹿追高等学校の新校舎が昨年10月に落成し、その記念に神田日勝の『馬(絶筆)』の陶板画が鹿追町の芸術のシンボルとして生徒玄関のロビーに設置されました。これを機に、日勝の作品に触発されて画家をめざす第二の神田日勝の出現が期待されます。

『牛』修復



開館以来、日勝の作品を年次で修復を行っており、『飯場の風景』、『家』、『馬(絶筆)』、『画室C』、『画室B』、『人と牛C』、そして昨年『牛』の修復が完了し、これにより第一期修復計画が終了しました。

# 寄稿文

## 人と人の縁故

与志崎 朗。私達深川に住む絵描き仲間には大きな存在でした。彼は道内ではあまり知られていませんが、自由美術 主体美術の会員として活躍していました。彼は看板店を営み、独学で絵の勉強を



**渡辺 貞之 氏**  
1940年旭川市生まれ。1964年北海道芸科大学旭川分校美術科卒。1970年、一線美術展都知事賞受賞。82年、安井賞展出品。85年、全道展協会賞受賞。87年、独立美術展出品。92年、全道展会員。98年、北の作家展出品。91年より、深川市アートホール東洲館館長

の美術論は説得力があり、当時の中央画壇の様子や近代芸術論彼の描く雪道を馬橋(ぼり)に引かれて行く花嫁や農民の愁いのある表情は、パイプルの聞くように心に浸み入りました。彼の持論である、「生活から滲み出るリアリティ」は、今の私の色や線の中に生きているように思えます。

神田日勝。当時、全道展に出品する私達にとつては憧れの人でした。全道展に入選すると仲間が集まり、酒を酌みかわしては熱く芸術論を語る時、いつも話題に出てきたのが神田氏の絵のことでした。あの「生活から滲み出るリアリティ」は、私達にとつては本当に感動するものでした。日勝氏が亡くなされたとき聞いた時、とにかく鹿追に行ってみようと躊躇することなく話がまとまりました。奥様のご好意で日勝氏のスケッチブックを見せていただき

最初に神田日勝について小論を書いてから、もう三十年余が過ぎた。妻ミサ子さんを訪ねたのは一周忌の頃だから間もなく三十三回忌が来るはずと思う。早いもので、ぼくたちもみんな高齢者になった。

この小論を読み返してみると、ぼくは彼の絵画と彼の暮らしを不即不離なものとして捉え、それだけを飽きずにパズルに書き連ねていることがわかった。つまり彼の作品を見てみると、彼の創作活動が暮らしにせつないほど密着して、そこから滲み出る「生活感」が作品にリアリティを与え、見る側を熱く惹き込む魅力になっていくと感した。

この感想は、宗左近に「只ならぬ異様さ」を感じさせた「室内」まで、一直線につながっている。しかし日勝の表現形式は一直線ではなかった。特に晩年の三年ほどはポップな寄せ集めの構成からアンフォルメルに近い奔放なストロークまで、幅広い作風にトライしている。どう見ても試行錯誤で、のしかかる運命の呪縛から逃れようともがいているように見える。その後だけに、ぼくは日勝のこの試行をめぐる心理の逡巡が気がかりになった。(そのことをぼくは一九七八年の道立近代美術館の「神田日勝の世界」展図録で、「無力感」とか「本意ながら」とかという言葉でふれている)

三年前、ぼくは彼の兄一明氏に頼まれ「神田一明画集」に、画業について書かせてもらった。画学生頃から六十年代前半までの生活派的モチーフが、六十年代後半に入つて、激しい原色とタッチが乱舞する目まぐるしい画面に変貌したことに注目した。この時期の一明氏は、画業でも生活でも、波乱含みのうねりの渦中ではがいていたようなのである。

言うまでもなく、ここに、兄弟二人の時期さえ一致した共通の悩みが透けて見える。二人の画面に現れた躊躇(とまど)いは、画家として生きる境遇の理想と現実の乖離へ向けた焦慮感であり無力感であろう。

八木義徳は小説「漁夫画家」を書く前に、有島武郎の「生まれ出する悩み」を読んで、「漁夫と画家のこんな暮らしが両立するわけがない。これはフィクションなんだ」と感じた。後にモテルの木田金次郎を知って「どうしても会ってみたい」と思ったという。農民や漁民の過酷な労働と時間的束

## 生活感と焦慮感



**吉田 豪介 氏**  
1935年根室市生まれ。1957年北海道大学卒。1961年から新聞雑誌に美術評を執筆。1971年から展覧会の企画にも参画。[THE VISUAL TIME]、[札幌アヴァンギャルドの潮流展]等現在 美術評論家連盟会員 北海道美術ペンクラブ同人 市立小樽美術館館長 著書 「北海道美術をめぐる25年」「北海道の美術史 異端と正統のダイナミズム」等



神田日勝「家」1960



神田一明「室内A」1960

縛は、質的にも量的にも、専門画家とはことごとく違う質を持っている。それだけに日勝の画家としての位置は特異なものだと納得したい。したがってその評価も、一般的な画家の創作活動の調査研究とは微妙に異なるアプローチが必要であろう。いたずらに伝説の人になって、口承文芸の中の人物のように言い伝えられ宝探しのように作品の発掘が新聞記事になっていくのを、いかなるものかとぼくは憂える。

来年、神田日勝記念館が開館十周年を迎える。アプローチの幅も次第に広がっていくに違いない。例えば何故か兄一明氏との関係について、本格的に調査がなされていない。二人の初期作品を比較すれば、興味深い類似とその底流にある異質性が、くつきり浮かび上がるに違いないと、ぼくは予感する。

# 秋から冬の催事 ア・ラ・カルト I

## 芸術鑑賞バスツアー 『平山郁夫展』

北海道立近代美術館  
平成十三年十月二十一日

画家の初期作品をはじめ、仏教やシルクロード、日本の古寺が描かれた作品を三十六名が鑑賞。参加者はシルクロードの雄大な風景に魅了されていました。



## 子ども芸術鑑賞ツアー 『バルビゾンと 田園の画家たち』

北海道立帯広美術館  
平成十三年十二月二日

参加者六名はスライドを見ながら美術館と展覧会についての説明を受けた後、作品を鑑賞しました。緑あふれる森の光景や、農民たちの素朴な姿を描いた作品などに子どもたちは興味深く見入っていました。



## ファミリー美術館事業

## 『神田日勝の絵の なぞを探ろう!』

平成十三年十二月九日

親子対象に、神田日勝や神田日勝記念館について、ワークシートなどを用いて、クイズをしたり、展示室で説明を聞いたり、収蔵庫の中を見学したりしました。最後にクイズの正解をスライドを見ながら確認しました。参加者は親一名、小学生七名、そして小学校の先生が一名見学参加してくれました。



## 冬休み子どもワークショップ 『立体凧を作ろう!』

平成十四年一月十六日

小学生を対象とした凧作り。まず、ビニールと竹ひごで簡単に作れる平面凧から製作。植田博氏が作り方や工夫の仕方をていねいに説明してくれました。また立体凧は木の角材を組み立て、ビニールを張って製作。十九名が参加し、皆とても一生懸命で、野外では元氣よく走り回り、楽しそうに凧を飛ばしました。(会場 鹿追町民ホール)





## 秋から冬の催事 ア・ラ・カルト II

### 子ども絵画教室

油絵講座  
平成十四年一月七日～九日

講師に村上俊彦先生を迎え十三名が参加しました。花瓶や果物などの静物をモチーフに作品づくりに挑戦、子どもたちは油絵の色の配合や陰影の表現に苦心しながら、作品製作に熱心に取り組んでいました。

(会場) 鹿追町民ホール

### 絵画教室

油絵講座  
平成十四年二月六日・八日・十三日・十五日

油絵の初心者を含む六名が受講。村上俊彦先生の指導のもと、果物やかごなどの静物を描きました。色の配合や作品に深みをつけることなどに苦心しながら、作品を仕上げていました。

講座終了後、村上先生を交えた絵画サークルの会の絵画学習会に参加。加筆した作品や以前に描いた作品についてのアドバイスを受けて、油絵制作に興味を募らせていました。

### 米坂ヒデノリ 小品展

平成十四年三月二十三日～三十一日

彫刻家、米坂ヒデノリ氏の小品展が神田日勝記念館ロビーで開催されました。ロビーでは初めての試みで、猫や鼻などのブロンズ四点を展示しました。



### 神田日勝記念館での 学校利用

平成十四年度から学校完全週五日制に伴い、鑑賞や総合学習との関連で神田日勝記念館を活用して授業を行う機会が昨年の春から増えてきました。鹿追町内の小中学校では、主に図工や美術の鑑賞授業として、校内で担任や教科担任が教える形ではなく、記念館を積極的に利用して、取り組むようになってきました。具体的には、ワークシートを使い神田日勝の作品や記念館についてクイズをしたり、作品について子どもたちから感想や質問を受けたり、収蔵庫を見学したり、スライドで関連した作品や資料、風景などを紹介したりしました。

### 春休み子どもワークショップ 『みんなで作ろう！』 ユニークハウス！

帯広在住の建築家でアーティスト活動もしている吉野隆幸氏を講師に迎え、ダンボールの廃材や新聞紙、広告紙などを使って、ユニークハウスを作りました。一日目は三班に分かれて設計プランを話し合い、投票により塔のある隠れ家に決まり、シークレットベース・キャンプと名づけ、秘密のドアなどしかけを施すこととして、二日目に実際の作業に取りかかりました。ダンボールを積み上げ、新聞紙を貼りつけ、巻きダンボールでやぐらを作りました。(四月二日から七日まで鹿追町民ホールロビーに展示)



